

坂口安吾の歴史観—古代東アジア史を中心に

早川芳枝（IRCP 客員研究員）

キーワード：坂口安吾、「新日本地理」、「高麗神社の祭の笛」、古代史、
古代東アジア史

1 はじめに

坂口安吾は1952年から1953年にかけて、「安吾の新日本地理」¹シリーズや「安吾史譚」などの作品において独特な歴史観に基づいた史論を展開した。とりわけ日本の古代史に関しては『古事記』や『日本書紀』の記述内容を丹念に読み込んでおり、天皇家と蘇我氏の系図を自作するなど記述された内容に基づく考察に努めている。とはいえそこから導き出される結論は歴史学的な常識からは大きく逸脱したものである。

安吾が日本史を考察する際の作法や手順は、一般的な歴史学の常識に則ったものではない。史実として歴史書に記述されたものを材料とはしているものの、そこに書いてある「事実」を額面通りには受け取らない。むしろ「事実」とされることによって隠蔽された真実を暴くことに主眼を置いているからである。

その独特な方法を安吾自身が「歴史とはタンテイの作業と同じものだということである」と「歴史探偵方法論」²で語っている。とはいえこのような方法を「素人タンテイのナマクラ手口」（「飛鳥の幻」と卑下したり、「学者の鑑定眼とちがつて探偵眼だからなさけない」（「安吾・伊勢神宮にゆく」）などと評していることから、歴史学的手法に基づいて既存の歴史観に違和を唱えようと意図していないことは明白である。

しかしながらこうした作品群は1950年代初頭のいわゆる「逆コースの時代」において大きな意味と価値を持つと先行研究において評価されてきた。特に川村湊は「戦後大々的に唱えられた騎馬民族征服説や、北朝鮮の学者による、三韓の日本列島分割支配説といった衝撃的な学説を先取りしたもの」³と安吾の先見性を評価している。またこれら一連の歴史論を戦後天皇制との関わりから分析している先行論に安田孝「安吾・天皇・天皇制」⁴や花田俊典「坂口安吾のディコンストラクション—

1 「新日本地理」は『文藝春秋』に全10回で連載された。特に古代史を論じているものは、第1回「安吾・伊勢神宮にゆく」（1951年3月）、第4回「飛鳥の幻」（同年6月）、第7回「飛驒・高山の抹殺」（同年9月）、第10回「高麗神社の祭の笛」（同年12月）である。以下引用はすべて初出誌による。

2 坂口安吾「歴史探偵方法論」（『新潮』1951年10月）

3 川村湊「坂口安吾の歴史観」（『国文学解釈と鑑賞』、1993年2月）

4 安田孝「安吾・天皇・天皇制」（『人文学報』、2004年3月）

「安吾・伊勢神宮にゆく」一」⁵などがある。

一方で安吾が特異な歴史観を確立していく過程については、野村幸一郎に喜田貞吉の学説が与えた影響を検証した論がある⁶。安吾の歴史小説に関しては、一九四〇年代の史学界の研究動向との関連を成田龍一が検証している⁷。しかし日本という国の枠組みを越えた視点から、日本という国家が成立する以前の歴史を構想する発想が何を元にして生まれたのかは必ずしも明らかになってはいない。

すなわち安吾が「道鏡童子」⁸に至って述べる、「国史以前に、コクリ、クダラ、シラギ等の三韓や大陸南洋方面から絶え間なく民族的な移住が行われ、すでに奥州の辺土や伊豆七島に至るまで土着を見、まだ日本という国名も統一もない時だから、何国人でもなくただの部落民もしくは氏族として多くの種族が入りまじって生存していたろう」という発想はどのような基盤から生まれ出たのだろうか。

論者はかつて飛騨地方の郷土史料や安吾が参照していた日本史関連の文献を調査し、古代史を分析する際にはあくまで史料や歴史書の記述をテコにして独自の論を展開していることを明らかにした。しかしながらそれはあくまで『古事記』や『日本書紀』を中心とする日本の古代史に限定されており、東アジア全体の戦乱と「日本」の成立という視点で古代史を展開していた安吾の視点を十分には分析しきれてはいなかった。その反省を踏まえ、本論文では安吾の歴史観と当時の東アジア史の関係を取り上げたい。

2 坂口安吾の日本古代史観

安吾が独自の古代史観を披露したのは「新日本地理」シリーズの第一作「安吾・伊勢神宮にゆく」である。唐突に「日本にはそれまでに何回もの侵略や征服が行われたに相違ない。そういうことが何回あつたか判らないが、その最後の征服者が天皇家であつたことだけは確かなのである」という結論が述べられるが、それは伊勢神宮とその周辺にある神社、そして猿田彦や庚申（庚申）、蘇民将来子孫の札などの民間信仰の実態からの推測であることが明らかになっていく。

その際、「そして天皇家に直接征服されたものが、大国主命だか、長スネ彦だか、蘇我氏だか、それも見当はつけ難い」と言及しているように、前提として『古事記』や『日本書紀』の記述を事実とは見なしていないことは明白である。このような傾向は、「飛鳥の幻」に至ってよりいっそう顕著になっていく。『上宮聖徳法王帝説』と『日本書紀』を比較検証した上での蘇我天皇論である。むろん歴史的な分析から導き出されたものではないし、安吾自身もそれが単なる「下司なカングリ」であることを下記のように認めている。

5 花田俊典「坂口安吾のディコンストラクション―「安吾・伊勢神宮にゆく」一」（『国語国文薩摩路』2004年3月）

6 野村幸一郎「古代朝鮮と日本―坂口安吾の日朝同祖論」（『國文學』2005年12月）

7 成田龍一「一九四〇年代の歴史意識と坂口安吾―試みのための覚書」（『安吾からの挑戦状 坂口安吾論集Ⅱ』ゆまに書房、2004年）

8 坂口安吾「道鏡童子」（『オール読物』、1952年2月）

(乙巳の変で一論者注) 大極殿で入鹿が殺され、蝦夷がわが家に殺されたとき、死に先立つて、天皇記と国記を焼いたそうだ。もつとも恵尺という男が焼ける国記をとりだして中大兄に奉つたという。

蘇我氏の亡びるとともに天皇家や日本の豪族の系図や歴史を書いたものがみんな一緒に亡びたのかね。(中略) しかし、蘇我氏の亡ぼされた如くに、それらの記録も亡ぼされた、ということ一度は疑つてみても悪くはなかろう。焼ける国記を恵尺がとりだしたということは、弁解的な筆法で、事実は一アベコベにそれを焼いたのが彼ら自身だとみること、歴史家や学者はやらないかも知れないが、タンテイというものはそういう下司なカングリをやらすものなのさ。

ここから見て取れるのは、勝者が書いた歴史書である『古事記』『日本書紀』は勝者の側から見て都合の悪い出来事を正確に伝えてはいないという疑いが前提にあるということだ。これらは「事実をマンチャクしている」と述べているように、むしろ都合の悪いことを敗者に押しつけて事実を隠蔽していると見た上で分析しているのである。だが安吾は、「天皇記」と「国記」を焼いたのが蘇我氏ではなく実は天皇家側であつただろうと推測するだけにとどまらない。『上宮聖徳法王帝説』の欠字を根拠として、更に一步踏み込んだ考察をして「蘇我天皇論」を主張している。

確かに『日本書紀』の皇極紀には、蘇我蝦夷と蘇我入鹿父子が自分たちが天皇であるかのような振る舞いをしていたという記述がある。蝦夷が甘樗岡に建てた自邸を上宮門(うえのみかど)、岡の麓に建てた屋敷を谷宮門(はざまのみかど)と称し、自らの子どもを王子と呼び始めたとある。しかしながら『日本書紀』では、彼らはその資格がないのに天皇然と振る舞っているという記述にとどまっている。

そして我々は通常、蘇我蝦夷や入鹿はそもそも天皇として即位する資格がなく、当然即位もしていなかったという前提に立ってその他の歴史書も読み進めている。だから『上宮聖徳法王帝説』を目にしても、その欠字を意図的なものとは見なさない。しかし『日本書紀』が作られた目的を「書紀の役目の一つが蘇我天皇の否定であるとする」という前提に立つ安吾は、欠字が後世の筆写時に意図的になされたとみなして、以下のような考察をしている。

「□□□天皇御世乙巳年」は皇極天皇の飛鳥ではなく、甘樗岡だか林太郎だか他の何物だか知らないが、蝦夷天皇か入鹿天皇を示すどれかの三字があつたのだ。私はそう解くね。(中略) 蝦夷入鹿は自ら天皇を称したのではなく、一時ハツキリ天皇であり、民衆がそれを認めたのだ。私製の一人ぎめの天皇に、こんな怪しい記述をするはずはないね。その程度のことは、否それよりも重大な肉親の皇位争い、むごたらしい不吉な事件はほかにいくつもあるではないか。

確かに『古事記』にも『日本書紀』にも皇位争いや謀反による反乱と鎮圧の物語が多数収録されており、兄弟間や叔父と甥の間など血縁者同士の皇位をめぐる戦いも多数見受けられる。物部守屋のよ

うに誅殺された大臣も登場しており、入鹿が中大兄皇子（天智天皇）に誅殺された乙巳の変が飛び抜けて凄惨な事件だったわけではない。それにもかかわらず、安吾は「日本書紀が蝦夷入鹿を誅するのを記述するに途方もないテンカンやヒステリーの発作を起している」と断じている。それはとりもなおさず『上宮聖徳法王帝説』という同じ事件を記録しながらその描き方が異なる書物が存在したからに他ならない。

この『上宮聖徳法王帝説』は『日本書紀』とは異なり成立年代がはっきりしていない。原本は平安初期には成立していたと有力視されているが、写本末尾に書かれた法隆寺の僧相慶の名から 12 世紀後半に筆写されたと推定できるだけである。成立年や作者、成立の経緯が不明なため、『日本書紀』に比べると信頼性がやや低く扱われがちな資料だ。しかし『日本書紀』では省略されている聖徳太子の系図の妻や女子について言及があるなど、いわゆる国史を補完する内容として評価されている。

『日本書紀』のように一般的に正統と見なされる資料を基準とし、そこに書かれていない事実が書かれた資料は、あくまで補完材料にとどめる。大きな矛盾がある場合は、どちらの資料の信頼性が高いかを考慮し、矛盾が起きている原因を考慮して判断する。それが歴史を考える一般的な方法だが、安吾はその「正統」という観念にこそ疑いの眼をむけ、あらゆる資料を自らの「タンテイ眼」の前で平等に扱おうとしているのだ。それゆえ、荒唐無稽でありながら、現実の歴史認識に対する鋭い批評としての作品が成立している。

むろん「飛鳥の幻」の直後に発表された「飛驒・高山の抹殺」やそれとほぼ同時に発表された「飛驒の顔」などにもこの傾向は見受けられる。そしてそこから「飛驒王朝説」という独特な古代王朝成立論を組み立てていくのである。

ヒダは古代史上、一度も重大な記事のないところで、昔から鬼と熊の住んでいただけの未開な山奥のようだ。ところが国史の表面には一ツも重大な記事がないけれども、シサイによむと何もないのがフシギで、いろいろな特殊な処置がある隠されたことをめぐって施されているように推量せざるを得なくなるのです。

「飛鳥の幻」で『上宮聖徳法王帝説』の欠字から歴史の真実を読み解こうとしたように、飛驒という古代史上の空白地帯から隠された真実に迫ろうとしていることが見て取れる。そしてその補強材料として引き合いに出されるのが、姉小路基綱の『飛驒八所和歌裏書』という 1500 年代に成立している文献なのである。明らかに『上宮聖徳法王帝説』よりも古代を探る上での資料価値は劣っていて、その論理は荒唐無稽としか言いようがない。

しかし一方で安吾は『ひだびと』『飛驒史壇』などの飛驒の郷土史研究の雑誌や『歴史学』などの学術雑誌にも目を通した形跡があり、当時発見されている出土物などの記録にも注意を払っていた可能性が高い。また『古事記』や『日本書紀』に記された古代の街道に関する記述も丹念に追っており、論理は荒唐無稽ながらも論を展開する材料に関しては、明治末から当時に至るまでの文献を読み込ん

でいることが窺える。さらに「安吾・伊勢神宮に行く」では古墳に、「飛鳥の幻」では吉野の水や井戸事情に注意を払っており、年月が過ぎても移動しない（移動できない）ものを分析の前提に置いている。

いわば土地や環境、場所などの動かせない・変わらないものを前提に置いた上で、文献という（必ずしも正しくないかもしれない）証言と、出土物などの証拠を基に展開される一種の「推理」とも言うべき史論が展開されているのである。この「タンテイ眼」が最も面目を発揮するのは「新日本地理」シリーズの最終章である「高麗神社の祭の笛」以降、大陸と朝鮮半島、日本の古代史から中世史までを一つの視点で読み解いていこうとする意図が確立してからである。

3 高麗神社と古代東アジア史

さて本章では「高麗神社の祭の笛」に見える安吾の歴史観と、当時安吾が参照していた可能性が高い東アジア史や考古学関係の文献を比較してみたい。今までの作品中でも「蘇我天皇論」や「飛驒王朝説」など既存の古代史からは逸脱した論を展開してきているが、「高麗神社の祭の笛」に至るとその視点が日本だけでなく西域から東アジアを包括するような広い視点から日本の古代史を論じるようになる。

そもそもこの作品中で安吾が取材に向かっている高麗神社は、『続日本紀』に見える高句麗からの使節の一人であった若光を祭神としている。それゆえ、取材や執筆に先立ち朝鮮半島の歴史や高句麗および百済や新羅などの歴史もある程度調査済であった可能性は高い。安吾の蔵書は『坂口安吾蔵書目録』⁹によって明らかにされており、（むろん蔵書の他に文献を読んでいる可能性は高いが）どのような書物からどのような知識を知り得ていたのかは推測ができる。

とはいえ、まず安吾が前提とするのは日本および高句麗、百済、新羅といった国家とそれを構成する民族という枠組み以前の問題だ。「扶余族の発祥地はハツキリしないが満州から朝鮮へと南下して、高句麗、百済の二国をおこしたもので、大陸を移動してきた民族である」と述べた上で、彼らが日本列島に移住していたであろうことを予想している。

自分の一族だけで自分勝手に海をわたり、どこかの浜や川の中流、上流などで舟をすて、自分の気に入った地形のところへ居を定めた。というテンデンバラバラの家族的な移動は、日本の諸地に無数にあつたものと想像しうるのである。（中略）

つまり天皇家の祖神の最初の定着地点たるタカマガ原が日本のどこに当るか。それを考える前に、すでにそれ以前に日本の各地に多くの扶余族だの新羅人だの移住があつたということ、及び当時はまだ日本という国の確立がなかつたから彼らは日本人でもなければ扶余人でもなく、恐らく単に族長に統率された部落民として各地にテンデンバラバラに生活しておつたことを考

9 新津市文化振興財団編『坂口安吾蔵書目録』（新津市文化振興財団、1998年）

えておく必要がある。

これは江上波夫が仮説として唱えた「騎馬民族征服王朝説」などとも通底する考え方である。江上の「騎馬民族征服王朝説」も半島から騎馬民族が大挙して日本に侵入したのではなく、長い年月をかけて少しずつ移住していったと推定している。この仮説はいわゆる「魏志倭人伝」は倭に牛馬がいないと記しているのにもかかわらず、古墳の副葬品にある時期から馬具が増えることが根拠の一つとなっている。

今ではほとんど否定的にとらえられている仮説であるが、安吾の蔵書の中には、満州から朝鮮半島、日本の考古学的出土物には共通点が多いことを指摘する文献がいくつか見受けられる。特に明治から戦後にかけて活躍した人類学者鳥居龍蔵による『有史以前乃日本』（磯部甲陽堂、1918年）には、畿内周辺で出土する石器時代から弥生時代の遺物は朝鮮半島や満州出土の遺物と共通点があることを指摘している。

私はすでに先史考古学上より畿内の石器時代の民衆は北方的色彩と香気を帯ぶと申しましたが、
これは単一な空想や理論でなく、是等の遺跡遺物はよく朝鮮、満州、沿海州東蒙古等の其れに類似して居ります。即ち考古学上から云へば畿内の石器時代の民衆は是等と比較すべきものであります。¹⁰

同書中でしばしば指摘されるのが、古代のアイヌ民族が残したと推定できる遺物よりも、朝鮮半島や満州出土遺物の方が畿内の出土物と共通点が多いということである。また銅鐸によく似た遺物は朝鮮半島でも出土しているが、この銅鐸は中国南方からの影響ではないかという主張もたびたび記されている。つまり、鳥居は日本の古代文化が満州や蒙古など北方からのみ影響を受けているとはとらえていない。しかしながら「固有日本人」は北方から移住してきたという立場をとり、次のような仮説を述べている。

日本に右の弥生式派遺物を遺した者は、古代史に所謂の国津神の祖先であつて、其の遺跡及び遺物が、朝鮮、満州及び東蒙古沿海州等の物に酷似して居る点から見ても、これ等の国津神即ち固有日本人は、朝鮮半島を経て或は沿海州辺から日本海を渡って日本に來たものと思はれる。(中略) 即ち固有日本人なるものは、朝鮮を経て北方民族が漸次渡來し、長年月間ここに土着して民族を為したるものと見るべきであつて、其の石器時代の遺跡遺物は、海を隔てたる朝鮮、満州、蒙古等のそれと、聯関して居るのである。¹¹

10 鳥居龍蔵『有史以前乃日本』（磯部甲陽堂、1918年）p108

11 前掲書 p207

鳥居龍蔵自身が日本の植民地拡大とともに調査地域を広げていったことや、同書が大正期に刊行された講演録の体裁をとっていることなどを考慮すると、政治利用された「日鮮同祖論」と似た文脈を持つ主張に読めてしまう内容である。とはいえ戦後の江上による「騎馬民族征服王朝説」を先取りする部分もある。日本と朝鮮が「祖を同じくする」と主張することと、満州と朝鮮を経由した騎馬民族が日本の土地を征服して王朝を建てたということは主体をどこに置くかの違いでしかないからだ。

とはいえ、出土物という動かぬ証拠はそれをどう扱って歴史の青写真を描くかという問題はあるものの、日本と朝鮮半島の古代文化に共通性があることを示すものではある。史書に記された事例以外にいつどこへ移住があったのかは不明としか言いようがないが、小集団による大陸や半島から日本列島への移住が行われていた可能性は高いだろう。そして先に土着していた集団と融合して現日本民族の祖となる集団が誕生したと推定する仮説は戦前戦後を通して一般的だった。

安吾の蔵書でいえばモラエス著・花野富蔵訳『日本歴史』（明治書房、1942年）や、佐野学による『日本古代史論』（国民社、1946年）などでも同様の説が認められる。とりわけ佐野は「日本国家の創建者として記載されてゐるいはゆる天孫人種は、世界史にいくたの波瀾ある局面を巻き起しかつ多くの歴史的業績を残したところの、北アジア系遊牧民族の重要な一支流であつたと推測せられる」と記しており、騎馬民族渡來說が広く受け入れられる素地があつたことを裏付けている。

こうしてみると、安吾の歴史観も大枠は戦前から戦後にかけての歴史学界の潮流にのっとっているかのように見える。しかし安吾らしさが色濃く出て来るのは、史書に記録されている何気ない記述を、東アジアの国際情勢と絡めて読み解く点である。

高句麗と百済と新羅の勢力争いは、日本の中央政権の勢力争いにも関係があつたろうと思われる。なぜなら、日本諸国の豪族は概ね朝鮮経由の人たちであつたと目すべき根拠が多く、日本諸国の古墳の出土品等からそう考えられるのであるが、古墳の分布は全国的であり、それらに横のツナガリがあつたであろう。そしてコマ系、クダラ系、シラギ系その他何系というように、日本に於ても政争があつてフシギではない。むしろ、長らくかかる政争があつて、やがて次第に統一的な中央政権の確立を見たものと思われる。

周辺諸国の情勢と国内の政治状況が分かちがたく結びついていることは、現実の政治状況と国際情勢を考慮すれば一目瞭然である。しかし戦中は皇国史観に基づいた歴史観が大手を振るっており、周辺諸国の情勢が国内の政治的決定や政策を左右していたということを正面から述べている史学書は少ない。安吾の蔵書中では、戦後に新制高校生向けの学習参考書という位置づけで刊行された芳賀幸四郎の『日本史新研究』（池田書店、1950年）に次のような見解が見受けられるのみである。

仏教渡来に際し蘇我氏が崇仏を主張し物部氏が排仏の立場をとったのも、単に思想信仰上の争いというよりは、政治的反目がたまたま宗教上の争いの形をとったものにすぎない。（中略）超

党派的に処理すべき外交問題さえも政争の具に供される有様であった。即ち物部氏は新羅と結び、これに対し蘇我氏は百済と結び、従て半島経営策が一貫せず、任那日本府の滅亡を招いた。¹²

当時日本国内にはたくさんの渡来人が暮らしており、秦氏や東漢氏など氏族集団を形成している渡来人たちも存在した。彼らは進んだ知識や技能を持って朝廷に仕えたり、有力豪族に仕えたりしており、状況によってはルーツとなる外国との外交政策に影響力を持っていたに違いない。またこうした氏族とのつながりや外国とのパイプの有無が豪族の政治的優位性を左右したはずである。

この問題に関して、安吾はかなり踏み込んだ論を展開している。当時は日本という国家が確立しているわけではなく、「時の政府によって特に朝鮮の一国と親しんだものや、朝鮮の戦争に日本から援軍を送った政府もあり、そこに民族的なツナガリがあったのかも知れない」と述べた上で、こうした状況に終止符を打って国内統一を図ったのが聖徳太子であっただろうという見立てをしている。

何系何系の国内的の政争が各自の祖族やその文化にたよる限り国内の統一はのぞめない。これを統一する最短距離は、そのいずれの系統の氏族に対しても文化的な母体をなす最大強国の大文化にたよるにまさるものはない。(中略)ともかく日本統一の機運を生みだした日本最初のまた最大の大政治家は聖徳太子であつたと云えよう。

一般的に推古朝で皇太子となり、政治改革を行う一方で大陸からの文化を取り入れて仏教の普及に努めたとされる人物だが、安吾はその文化の輸入を国内統治が目的だろうと断じている。明治維新同様、文化的に進んだ国から技術や学問を取り入れることを当然のごとくとらえがちだが、安吾はそこに国内統治という政治的意図を見透かしているのだ。確かに乙巳の変以降、日本を律令国家とすべく様々な法整備が行われたとする記述が史書中に見られるようになっていく。隋や唐という当時の先進国をモデルに天皇家を中心とする強力な中央政府を樹立するとういうことが、当時の支配層にとっては急務だったからだ。

そして安吾の歴史への推理はさらに時代を下ったところまで進んでいくが、先に高麗郡に関する言及に触れておきたい。安吾は「藤原京を経て奈良京に都したとき、日本の中央政府はどうやら確立の礎が定まったと見ることができる。武蔵の国に七ヶ国のコマ人をあつめてコマ郡をおいたのはその時のことだ」と述べ、日本の中央政府の確立と、コマ人(高句麗からの渡来人)を武蔵に移住させたことが表裏の関係にあるととらえている。

奈良京(平城京)遷都が710年で高麗郡の設立が716年であり、直後といえれば確かに直後の時期ではある。「全国各地に土着した多くのコマ人は決して自らコマ人などとは称せず、中央政府のもとに日本人になりきってしまった時だ。七ヶ国の一千七百九十九名だけが、なぜコマ人と称して異を立て

12 芳賀幸四郎『日本史新研究』(池田書店、1950年) p18

る理由があつたのだろうか？」と安吾は疑問を呈している。

しかしコマ系の人々を高麗郡へと移住させることには、何らかの政治的意図が働いていたとののではないかと疑念を持っていたはずだ。中央政府が一括管理しておく必要があつたか、コマ人を排除することで他のグループとの結束を図ったのか。その謎に対して安吾は言及していないが、こうした古代渡来人集団間の軋轢が後世に形を変えて存続していったのではないかという大きな見通しを示している。

すでに三韓系の政争やアツレキは藤原京のこのころから地下にくぐつたことが分るが、日本地下史のモヤモヤは藤原京から奈良京へ平安京へと移り、やがて地下から身を起して再び歴史の表面へ現れたとき、毛虫が蝶になつたように、まるで違ったものになつてた。それが源氏であり、平家であり、奥州の藤原氏であり、ひいては南北両朝の対立にも影響した。(中略) 彼らが蝶になつたとは日本人になつたのだ。しかし、コマ村だけはいつまでも蝶にならなかつた。

この「新日本地理」シリーズ以前に、キリシタン関連の資料や島原の乱について調査するなど、安吾はかなり広範囲の時代の歴史関連文献に目を通してている。またこのシリーズの直後に「安吾史譚」も連載しており、源平の戦いや戦国武将、キリシタン大名に関係する文献には目を通してていることが推測できる。蔵書中にも下調べのために読んだと思われるものが散見している。だが、そうした資料から一足飛びに古代渡来人集団と源平の争いや南北朝の対立に結びつくものではない。

それはやはり古代に日本に渡来しながらもコマ人と称し、今なお高麗神社の祭神として祭られている若光とその信仰を守る人々を目の当たりにしなければ浮かばなかつた発想なのではなかつたか。やや言い過ぎのきらいはあるかもしれないが、安吾自身「私は武蔵の国コマ郡コマ村と、コマ神社の存在については以前から甚だしく興味をもつていて、この新日本地理に扱うために、すでに今年の二月コマ村を訪問しようとしたことがあつた」と述べているのである。少なくとも資料のみ見ただけであつたとしても、1300年以上祖先が高句麗からの渡来人であることを忘れずに神社を守り続けている一族の存在が、こうした大胆な発想の土台となっていることは確かだろう。

4 おわりに

安吾は偶然と幸運が重なって毎年10月19日に行われている例大祭の獅子舞を見物しており、その時に奏される笛の譜と呼ばれる祭り囃子を克明に記録している。笛の音を仮名に置き換えて音写したような内容で、ほとんど意味をなさないカタカナの羅列にしか見えない。実際、ただ一人の歌手のそばで台本と照らし合わせて聞いても「一語もハツキリしない」と嘆いている¹³。

とはいえ安吾はそこで考察を断念していない。音の組み合わせが7音に絞られると分析した上で、

13 幸い論者も本年10月19日の例大祭に赴き、歌手の方の近くで「雌獅子隠し」の段を観覧する機会を得た。一人だけでほぼ囃子詞だけの歌を歌っているため、喧噪にまぎれて聞きとりにくかつた。

まったく使用されない仮名があることと唇音（マ行とパ行）が一切登場しないことを指摘している。日本語の濁撥音記号の付け方がパーリ語やサンスクリット語と比較するとおかしい（パ行とバ行は同じ唇音であるマ行に濁撥音記号をつけるべき）ということも引き合いに出しながら、扶余族が「アイウエオを日本に伝えた」可能性にまで思考をめぐらせている。

だがとっかかりとなるものを探し出して分析を試みる一方で、安吾はその祭り囃子の笛の音を「物悲しい」と評している。偶然祭の前日に行われていた練習に立ち会った時には「私は目をみはり、耳をそばだてた。私の心はずでにひきこまれていた。その笛の音に。なんとという単調な、そしておよそ獅子の舞にふさわしくない物悲しい笛の音だろう」と記し、分析も「タンテイ眼」を発揮することもなく聞き入ったことを窺わせる筆致だ。

笛の音に「遠くはるばるとハラワタにしみるような悲しさ切なさである」と率直な感想をもらし、その音律がかくれんぼの「も・う・い・い・かアーい」「まア・だ・だよーオ」というかけ声によく似ていると評している¹⁴。作中でも触れられているが、この獅子舞には「雌獅子かくし」という段があり、隠れた雌獅子を二頭の雄獅子が探す舞を舞う。探し求める場面での旋律という点では、たしかにかくれんぼの呼び声と共通している。

安吾はいたくこの笛の音に感動したらしく、「私がコマ村のことで第一番に皆さんにお伝えしたいのは、この笛の音なのだが、音を雑誌に出せないのが痛恨事です」とこの音が雑誌という媒体の都合上読者に届かないことに悔しさをにじませている。さらに宮司の息子に対して「写真屋を連れて、また明日、出直して参ります。だが、あの笛の音は写真にはうつらないからなア」と嘆くなど、笛の音を記録することへの執着が見受けられる。歴史書や古墳を前にした時のような距離を置いて分析する態度ではない。

そのことに安吾自身は自覚があるようで、「あまり感傷的で恐縮だが」とことわりをいれてはいる。とはいえ「異国の山中に流されて死んだ亡国の一貴族の運命を考えれば、かかる哀調切々たる楽が神前に奏されることにはフシギがありません」と、故国を失ってこの地に流れてきた祭神・高麗王若光の運命に思いを致している。それだけではない。「今日の日本が統一されてみんなが日本人になるまでには、一部にこのように悲痛な運命を負うた人々の群が確かに在ったのは事実ですから」と、今日の国家が形成される過程で悲しい運命に翻弄された人々に対する同情と共感を表明している。

本作品が発表されたのは1951年12月。高麗神社の例大祭が10月19日なので、おそらく10月から11月にかけて執筆されたものだろう。日本はサンフランシスコ平和条約への書名を果した直後であり、朝鮮半島は朝鮮戦争の戦禍に見舞われ、休戦協定を結ぶべく協議が行われている最中だった。戦火を逃れて日本に避難してきた密入国者の存在が社会問題化していた時期でもある¹⁵。そして何よ

14 論者が祭り囃子を耳にした限りでは、「言われてみれば似ている」と思う程度だった。会場アナウンスでは「高麗神社の祭の笛」で安吾が「かくれんぼ」に似ていると言及したことが紹介されていた。一般的に祭り囃子と聞いて連想するような賑やかさはなく物悲しい旋律である。

15 「高麗神社の祭の笛」には朝鮮半島からの密入国者への言及があり、「戦後の今日、朝鮮からの密輸や密入国には発動機船を用いているらしいが、それは監視船の目をくぐるに必要な速度がいるための話で、まだ沿岸に監

り先の大戦によって「国」の範囲や統治形態がが変わり、それにもなって人生の変化を余儀なくされた人々に対して思いを寄せていたに違いない。坂口安吾にとっても当時本作品を読んだ読者にとっても、高麗神社が示していた歴史は遠い過去のものではなく、現在の問題だったのである。

視の乏しかった終戦直後には大昔と変りのないアマの小舟でさかんに密輸や密入国が行われ、それで間に合ったのだ」と記されている。